

## はじめに

道教についての研究会では、道教とは何かということが議論されるのが常である。しかし、道教について厳密に定義することは難しいし、中国に発生した土着的な宗教がさまざまな宗教的要素を包み込んで形成されたものであって、定義することをむしろ拒むといった方が正確かもしれない。

今回の研究集会でも、われわれは道教の本質について多くの議論をすることはなかったが、麦谷邦夫氏の道教教理の核心についての報告は、それに答えたものである。

われわれの研究集会の目的は、東アジアの文化の基層に道教的なものを探り出すことであった。それが、東アジアとその周辺の文化的特質を規定するのに大きく関与していることが、意外にも認識されてこなかった。東アジア文化といえば、すぐに仏教をもって説明することがしばしばおこなわれてきたが、インドから伝来した仏教でもって東アジア文化の基底のすべてを掘り起こすことは、不可能であろう。

例えば、日本文化について考えてみよう。仏教公伝は6世紀になってからである。それ以前の宗教について、多くの人々が、積極的に問おうとしないのは、少し立ち止まって考えてみると不思議な現象であることがわかる。深い考えもなしに、仏教以前はアニミズムに起源する神道だと片づけられてきたが、それが、日本文化論の実状の一面を物語っている。しかし、近年われわれが、『日本書紀』や『古事記』あるいは『万葉集』の断片的な表現から古代日本に道教の存在を推定していたことが、考古学の発掘によってそのことが確実に実証されつつある。その点において考古学は今までの日本文化論の根底を着実に書き換えつつあることに謙虚に耳を傾けるべきであろうし、加えて従来の日本文化論がいかに皮相的であったかも認識すべきであろう。

われわれの周辺を見回しても、習俗、文学、芸術、医薬、庭園に道教の影をみないことはない。当然のことながら、日本人の心性にも及ぼしているはずである。精神史の見直しもまた必須の課題となろう。

そして、東アジアに視野を拡大しても、それぞれの地域における変容はあったとしても事情は全く同様で、道教に関わる文化は共有されている。

道教が東アジアを読み解くキーワードとして意味をもつことを確認する作業として今回の研究集会は企画された。

今回の研究集会の開催にあたり、国際日本文化研究センターの研究協力課と、明治大学講師（当時 中核的研究機関研究員）の佐々木憲一氏から多大の協力を得た。ここに記して謝辞としたい。